

論文の内容の要旨

論文題目 <第三の空間>への旅 ジャネット・フレイムと大庭みな子の作品
におけるディスプレイメントの修辞学
氏名 ヒル・ラクエル・アン＝ルイズ
(HILL RAQUEL ANNE-LOUISE)

本論文はジャネット・フレイム (Janet Frame, 1924-2004) と大庭みな子 (1930-) という、それぞれニュージーランドと日本を代表する女性作家の作品を、ディスプレイメントという切り口から比較考察するものである。ディスプレイメントは一般に社会や制度などからはみ出した者が経験する居場所のなさ、所在なさといった「場所」にまつわる喪失感を意味することが多いが、フレイムと大庭の作品においては、地理的なディスプレイメントはもとより、時空間的、精神的、文化的、言語的、ナラティブ的ともいえる多種多様な形をとったディスプレイメントが現われる。このような夥しいディスプレイメントは、文学的な戦略としてはどのような意味をもつのだろうか。本論文では、分析対象の文学作品におけるディスプレイメントが、「場所 (place)」、「故郷 (home)」、「国家 (nation)」(日本、ニュージーランド、国民、国家、国土などの広い意味を含む) という概念や、自己アイデンティティが構築されていく過程を考察するための新たな枠組み^{フレイムワーク}を提供してくれることを明らかにする。フレイムと大庭の作品は、それぞれ「ニュージーランド文学」ないしは「日本文学」の解釈と自己規定のプロセスに抵抗し、国家や歴史の名の下になされるカテゴリー化を破壊する<第三の空間> (third-space) でときおり互いに対話をする関係にある。この文学的空間はアイデンティティとは確固たるものでも場所に固定されたものでもなく、むしろ移動と転移のなかで絶えず交渉され続けるものであることを示唆する。

本論文の構成だが、研究対象と重要概念を解説する序章と結論部分である終章のほかに、二つに大別することができる。そのうち、第一部ではフレイムを、第二部では大庭を論じる。「ジャネット・フレイムの作品における<第三の場>」と題した第一部は四つの章から成っている。<第三の場>という言葉はベストセラーとなったフレイムの自叙伝三部作の第一巻『現在 (イズ＝ランド) の国へ』(To The Is-land, 1982年)の冒頭に出てくるキーワードであり、第一章でその意味を探る。フレイムの自叙伝(以下『自伝』)をとりあげる理由がいくつかある。まず、『自伝』は旧イギリス領植民地の移住者であるニュージーランド

人（パケハ）の両義性に満ちた文化的アイデンティティを鋭くとらえている。パケハのアイデンティティをめぐる描写は本論文でとりあげる作品を理解するための重要な背景となる。第二に、フレイムの『自伝』はナラティブ的なディスプレイメントの問題　せめぎあう複数の語り部の声とその語り部の信頼性の問題　を提起する。フレイムは物語の形式、とりわけ、「語り方」に深い関心を寄せており、とりあげる作品においても問題視されてゆくので、フレイムの『自伝』における語りの問題を最初に概観しておくことは後に取り扱う作品の理解に寄与すると思われる。

第二章では、中心（イギリス）／周縁（ニュージーランド）といった二項対立に着目しつつ、フレイムの三作目の作品である *The Edge of the Alphabet*（直訳は『アルファベットの縁』、1962年）という長編小説を考察する。とりわけ、アイデンティティを構築する過程において、祖国および故郷、場所、言語が果たす役割を探求してゆく。

第三章では、フレイムの六作目の長編小説である *A State of Siege*（直訳は『包囲の状態』、1966年）をとりあげる。一見したところでは、この小説は、ニュージーランドの南島で長年美術の教師を勤めた独り身の婦人が北島の荒涼たる小さな島に引っ越す物語にしかすぎないように思われる。しかし、この小説の多くを占める風景の描写に注目すると、先住民であるマオリのような、生まれた土地に対する強い帰属意識に憧れるパケハの心情がその風景描写の編み込まれていることが見えてくるだろう。

第四章では、フレイムが書いた最後の小説となった *The Carpathians*（直訳は『カルパチア山脈』、1988年）において、多層的に生起する地理的、時間的、文化的、言語的、ナラティブ的なディスプレイメントに焦点を当てる。主人公であるアメリカ人の女性が「記憶の花」というマオリの伝説の真偽を確かめるためにニュージーランドの小さな町にやってくる。しかし、マオリも含め、その町のほとんどの住民がその土地に対する帰属意識をもたず、むしろ自らをあたかも異邦人であるかのように感じ、その地に違和感をもっていることから、真正のアイデンティティを追求している主人公の期待はくじかれてしまう。

『カルパチア山脈』は「土着性（indigeneity）」と「真正性（authenticity）」の意義と、故郷＝場所とアイデンティティとの関係に対する疑問を読者に投げかける。

第二部では、大庭みな子の『浦島草』（1977年）に登場する「第三の世界」という意味空間について考えながら、大庭文学において、故郷や祖国や国家などという構造概念がどのように使用されているか、またどのように位置づけられ、どのような意味を付与されているかを探る。

第一章では、自叙伝ともいえるべき『舞へ舞へ蝸牛』といくつかのエッセイ集をとりあげ、十四歳のときに原子爆弾投下直後の広島を目撃したことと、アメリカ大陸で過ごした十年の余りが大庭に与えた影響を明らかにする。とりわけ、「日本」と「日本文化」を鋭く洞察するこれらのテキストにおいて、これまでの大庭みな子研究ではもっぱらフェミニズムというカテゴリーに限定されてきた大庭のポストコロニアル性をより大きな文脈で捉え直す。

第二章では、『がらくた博物館』(1975年)において、<異境 = outlandish>空間が作品内でどのように構築されており、そして何のために用いられているかを考える。大庭の作品におけるアラスカという場所は、日本人のアイデンティティのみならず、主体性というものの自体に揺さぶりをかける場所として重要な意味を担っているが、特定な場所を越えるヘテロトピアとして<がらくた博物館>を読む試みをする。とりわけ、国家と故郷といった概念に基づくアイデンティティと、それとは対照的なものとしてのディスプレイメントのモデルに基づくアイデンティティとの反目に焦点を当てて考察する。

第三章では、アメリカとヒロシマという場所が複雑に絡み合っている長編小説『浦島草』(1977年)をとりあげ、地理的、文化的、言語的、時間的、ナラティブ的なディスプレイメントの構造を分析する。長年アメリカで過ごした主人公は、二三歳になって日本に帰ってくる。彼女は二つの国と二つの言語のなかに宙吊りにされた状態で日本をさまようが、記憶の世界に入り込み、日本で出会う血縁者たちの一人ひとりの物語をその身に引き受ける。記憶とディスプレイメントの関係に重点を置くことによって、公式な歴史を転覆する魔術的リアリズムとしての『浦島草』を読み直す可能性を提起する。

終章では、第一部と第二部の分析を踏まえて、フレームも大庭も自らの作品にディスプレイメントの修辞学を用いることによって、既存の国家やアイデンティティの概念にしばられない、時間と場所を横断する新たな文学空間を志向していることを示唆する。その新しい文学空間を、ホミ・バーバの「第三の空間 (Third Space)」とエドワード・ソジャの「第三空間 (Thirdspace)」を援用しつつ、<第三の空間> (third-space)であることを明らかにする。